

# 万葉の川心まんようかわごころ

芳野の離宮に幸しし時の歌いでま

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

(巻第九 一七二三番歌)

瀧の上の 三船の山ゆ 秋津べに

来鳴きわたるは 誰喚子鳥たれよぶこどり

森に入ると、ひんやりとした空気と爽やかな風が迎えてくれた。何かを捨て、何かを見つげるために、今日の旅は森を選んだ。何でもない日曜日。ゴロゴロと過ごすのも良いけれど、文庫本を読みながら電車に揺られるのも悪くない。思い立って出かけたのは近郊の森林公園だ。

「四十にして惑わず」・・・実際四十歳から惑ってばかり。仕事をひと通り覚え、自分にできることとできないことも分かってきた。膨大な仕事の山はちつとも減らないが、任せられたことができたときは喜びもある。それなのに、今の自分は本当の自分か、本当にやりたいことはこれなのかいつも考えている。人生八十年とすると、半分は過ぎたわけだ。折り返してがむしゃらに走り続けたいというのでもなく、全く別の人生を歩きたいわけでもない。ゆつくり老いと向き合う親と、日々めざましく成長する子どもとの間にいて、なんだかただ忙しい。そういえば、いくつもの役をかもっている。子であり親であり、夫または妻であり、先輩であり後輩であり。それが、森に入ると小さな生き物に帰る。樹齢何百年もの木に囲まれると、自分は全くの幼子になる。大人のふりして何をあくせくしていたのかと笑ってしまう。小川のせせらぎに木漏れ日、小さな花に舞う蝶や響き渡る鳥の声。その中で取り戻していく心と体。今生きていることが奇跡で必然。ちっぽけだけど、生きてい



るだけでも良いかという気がしてくる。明日もまた明日の風がきつと吹いて、縁が結ばれ、また新しい何かと出合うのだろう。

奈良県吉野郡吉野町宮滝付近、岩場のかつて激端をなしていたところの南にある山が「三船の山」である。船形をしていて船岡山とも言われる。また、宮滝付近からの吉野川の対岸を秋津という。「喚子鳥」とはカッコウという説もあり、ホトトギスやカオドリという説もある。「滝の上の三船の山、秋津のあたりに来て鳴いているのは、誰を慕って鳴くのだろう。」恋しい人か妻か夫か、母か子か。万葉集の中には、「呼子鳥よ、そんなに鳴かないで、恋心が増してしまふ」と詠われた歌もある。静かな森に響き渡る鳥の声は、万葉人の心を揺らした。写真の碑は、吉野郡吉野町樽井の老人福祉センター中荘温泉玄関前に建てられており、その向こうに吉野川がゆったりと流れていく。山を川を渡りながら鳴く「呼子鳥」の自由さに心が惹かれていく。

善か悪か、○か×か、ちっぽけかすごいのか。どちらもあってどちらも自分。捨てても残る物もある。変わるものもあれば、そう易々と変わらぬものもある。何でもない平凡な今日の積み重ねが、まさに奇跡なのかもしれない。帰りの電車を待ちながら、遠く流れる川を見つめて考えていた・・・明日からまた「始めよう」と。